The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜翻訳＞キケロー『弁論家』（1）
Author(s)	渡辺，浩司
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要．2022，62，p．97-125
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87422
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

キケロー『弁論家』(1)

渡辺　浩司　訳

凡例

1　キケロー『弁論家』(全238節)の序文(1節から32節まで)の翻訳である。

2　底本は以下である。

Westman, R., *M. Tullius Cicero scripta quae manserunt omnia*, Fasc. 5 *Orator*, Leipzig, 1980.

3　ローマ数字はJanus Gruter版キケロー全集(1618年)の区分を示す。アラビア数字はAlexander Scot版キケロー全集(1588–1589年)の区分を示す。引用などでは前者を章、後者を節とする。

4　固有名詞について、ギリシア人名の場合はギリシア語形、ローマ人名の場合はラテン語形で表記する。ph、tp、chの音は、それぞれp、t、kと同じ音とした。

5　本文中で用いた記号については、[　] は底本が不要とする箇所を示す。ダッシュは底本のダッシュないし括弧である。(　) は底本に記されたギリシア語とラテン語を、〔　〕は訳者の補訳を記す。

6　章、節とは別に全体をいくつかの部分に区分けし、各部分の冒頭に見出しを付した。

ブルートゥスへ

Ⅰ　1　ブルートゥスよ、君の再三の要求を拒むことと、君の求めに応じることとのどちらがより難しく、より大切なのか私は長い間大いに自問しました。というのも私が心より敬愛し、また思うに私を最も愛してくれる人を拒むことは、とりわけその人の要求が正当であり、その人の好奇心がほめられるものである以上、とても困難だと私には思われ、他方で、履行することが難しく、想像力で把握することさえ難しいほどの仕事を引き受けることは、学識と思慮ある人の意見を尊重する者がすることでないと考えたからです。2　よき弁論家たちの間にこれほどの多様な相違が見られるからには、何が弁論の最高の種類と姿なのかを決め

ることよりも大変な仕事があるでしょうか。しかし、君がたびたび私に求めてくるので、私は、書き上げることができるという希望よりもむしろ試みたいという意欲からこの仕事に着手しようと思います。この仕事に着手せず君への好意が足りないと思われるよりも、思慮が足りないと思われてでも君の熱意に応えたいのです。

理想的な弁論家の追究

3　さて、君は私にしばしば尋ねました、雄弁のどのような種類を最も賞賛するのか、欠けるところなく、私が最高にして完璧と思うのはどのようなものか、と。この質問に対して、もし君が望むことを私が行い、君が尋ねる弁論家というものを描いたならば、私は、多くの人々の勉強意欲をそぎはしないかと恐れています。多くの人々は、できそうにないことは絶望してあきらめ、あえてやってみようと思わないからです。4　しかしながら、大いなる努力に値する一大事を望むならば、とにかく試みるというのがまっとうなことなのです。たとえ生まれつき秀でた能力を欠いていても、あるいはしかるべき学問の訓練を充分に受けてこなかったとしても、それにもかかわらず人はできるかぎり最善の道を取るべきなのです。というのも、一番を目指している人が、二番、三番に留まるのは不名誉なことではないからです[1)]。たとえば[2)]ギリシア人たちについて言えば、ホメーロス、アルキロコス、ソポクレース、ピンダロスだけに詩人の地位が与えられているわけではありません[3)]。彼らの次に位置する者たちにも、あるいは二番よりもさらに劣った者たちにも詩人の地位が与えられています。5　また哲学においてもプラトーンの偉大さはアリストテレースを書くことから遠ざけはしませんでした。またアリストテレース自身もその驚嘆すべき博識にもかかわらず他の哲学者たちの研究意欲をそぐことはなかったのです。

II　卓越した人たちだけが最高の研究から遠ざけられずにいただけでなく、職人たちでさえ、われわれがロドス島で見たイアーリュソスの絵[4)]やコース島のウェヌスの絵[5)]の美しさに及ばないからといって自分たちの技術から自らを遠ざけることはなかったのです。オリュンピアのユッピテル像[6)]やドリュポロス像[7)]の故に彫刻家たちが活動をやめることはなく、彼らは、自分たちが達成できることを行い、自分たちが上達できるところまで行ったのです。こうした人たちの数はとても多く、それぞれの領域において各自の功績はとても大きかったので、われわれは最高の彫刻家たちを崇敬する一方で、劣った彫刻家たちも賞賛するのです。

6　弁論家たちの間で、とりわけギリシアの弁論家たちの間で、たった一人の人物がすべての人に対してどれほど勝っていたかということは驚くべきことです。しかしながらデーモステネースが存命の間でも、偉大にして著名な弁論家が多くいました。デーモステネースの前にもいましたし、デーモステネースの後にもいなくなることはありませんでした。そうい

うわけで、雄弁の研究に自らを捧げてきた人たちの希望が砕かれ、彼らの勤勉さが衰える原因はないのです。最善なるもの自体はあきらめるべきではなく、立派な事柄においては最善なるものに最も近いことが偉大なのです[8)]。

理想的な弁論家とは

7　そして私はと言えば、最高の弁論家を描くさいに、おそらくこれまで存在しなかったような人物を形作ることになります。というのも私が問うているのは、誰が最高の弁論家であったのかということではなく、他の追随を許さぬ理想的な弁論家とはどのようなものなのかということだからです。理想的な弁論家の特質は、実際には弁論の初めから終わりまで終始現れることはめったになく、ときどきある箇所で、しかもある弁論家においてはよりしばしば現れ、ある弁論家においてはおそらくめったに現れることがないのです。8　ところで私は、どのような分野においても、たとえば仮面が顔を模倣しているように、本(もと)となるものから生じたものが本(もと)となるものよりも美しいというようなことはないと信じています。本(もと)となる美しさは目でも耳でも他の感覚でも知覚することができませんが、われわれはそれを想像力と精神によって把握するのです。かくしてピーディアースがつくった像、この分野においてこれよりも完璧なものをわれわれは見たことがありません、や先に言及した絵画の場合でも、それらの美しさにもかかわらず、もっと美しいものをわれわれは思い描くことができます。9　実際、かの偉大なる彫刻家は、ユッピテルやミネルウァの姿を作るとき、モデルとした人物を見ていたわけではなく、いわば美の最高の種類が彼の精神のうちに住んでいて、彼はこの美を眺め、この美に精神を集中させて、この類似物が出来上がるように自らの技と手を動かしたのです。III　したがって、姿と形において完全にして卓越したものがあるわけですが、実際に彼が表現するときは、目に見えるものをこの理念上の像に照らし合わすのです[9)]。これと同じように、われわれは完全な弁論の理想像は心で見て、その似姿は耳で捉えるのです。10　事物のこうした原型を、哲学のみならず弁論の最も[10)]偉大な指導者にして師であるプラトーンはイデアー（ἰδέα）と呼び、イデアーが生成することを否定します。プラトーンは、イデアーが常に存在し、知性と理性に[11)]依拠し、その他のものは生成し、消滅し、流転し、流れ去り、長らく同一の状態に留まることはないと主張します。それゆえ、理論と方法とにしたがって[12)]議論されるものはなんでも、その分野における究極の原型ないし像に還元されるべきなのです[13)]。

理想的な弁論家と哲学

11　この序文が、弁論の議論から導き出されたものではなく、哲学、しかも古くて人に知

られていない哲学の核心に由来しているので、批判を受けるか、あるいは少なくとも驚きを起こすことになると私は理解しています。というのも、われわれが探究する主題が哲学とどんな関係にあるのかと人は不思議に思うかもしれないからであり——これについては、事実そのものを見てもらい、その結果過去に遡ることにも一理あると思われれば十分でしょう——、あるいは、踏みならされた道から外れて新たな道を探し回っていると批判するかもしれないからです。12　しかしながら、とても古いことなのにほとんどの人々には知られていないことを私が語っているとき、しばしば新しいことを私が語っていると思われているのを私は知っています。そしてもし私が弁論家であるならば、また弁論家でありうるのならば、私を弁論家にしたのは弁論術の教室ではなく、アカデーメイアの広場だということを告白します[14)]。そこは多種多様の討論の場であって、プラトーンが最初に足跡を残したところです。プラトーンと他の哲学者たちの議論によって弁論家は最も非難されましたが、他方でまた助けられもしました。——雄弁の森のような豊かさはすべて彼らに由来しているのです。——しかしながら、弁論家は法廷での訴訟について充分な教育を受けてきませんでした。哲学者たちがよく言っていたように、法廷での訴訟については、より田舎風のムーサたち[15)]にゆだねたのです。13　このように、法廷での雄弁は、多くの哲学者たちから軽蔑され拒否され、多くの援助を欠いたのですが、それにもかかわらず言葉と格言で飾られた雄弁は大衆に讃えられ、少数の人たちの評価や非難を恐れなかったのです。その結果、教養ある人たちからは大衆に訴える雄弁が、教養のない人たちからはしっかりとした学識が欠如してしまったのです。IV　14　さて、これから明らかになることを最初に示しておきます。すなわち、われわれが求める雄弁家は哲学なしには生まれないこと、しかし哲学にすべてがかかっているのではなく、体育が俳優を助けるように哲学が雄弁家を助けるということです。——小さなことは大きなことになぞらえるのがしばしばとても正当なことなのです[16)]。——哲学の助けがなければ誰も偉大で多様なことを豊かに滔滔と語ることはできません。15　たとえばプラトーンの『パイドロス』の中でソークラテースは、かのペリクレースが他の弁論家よりも抜きん出ていたと語っていますが、それは、ペリクレースが自然哲学者アナクサゴラースの聴講者であったからです[17)]。ペリクレースがアナクサゴラースから高潔にして崇高なことを学び、話題が豊富で内容の豊かな弁論家となり、雄弁にとって最も大切なことを、すなわち弁論のどのような抑揚が人の心の各部分を動かすかということについての知識を獲得したとソークラテースは考えたのです。同じことはデーモステネースについても言うことができます。デーモステネースの書簡から、彼がプラトーンの勤勉な聴講者であったと知ることができます[18)]。16　実際、哲学者たちによる訓練がなければ、われわれは物事の類と種を理解することも、物事を定義して説明することも、諸部分に分けることも、どの帰結が真でどの帰結が偽かを判定することも区別することもできず、矛盾を見てとり、曖昧なものを分析する

こともできません[19]。弁論家に豊富な題材を提供する自然学について、何を言うべきでしょうか。人生について、義務について、徳について、死について、これらの事柄についての十分な訓練も受けずに、語ったり考えたり[20]することができると思っている人がいるでしょうか[21]。V　17　これらの多くのきわめて重要な事柄に、無数の装飾をつけなければなりません。それらの装飾は、かつては弁論術教師とみなされていた人たちによって教示されていたものばかりでした[22]。その結果、あの真の完全な雄弁に到達した人は誰もいませんでした[23]。考えることの訓練と話すことの訓練とが別々であり、また事実についての教育と言葉についての教育とが別々の人に求められていたからです。18　そういうわけで、われわれの父祖の世代が文句なく雄弁の第一人者とみなしたマルクス・アントーニウス[24]は、生まれながら理解力と洞察力のある人物だったので、彼の残した唯一の著作の中で、弁が立つ人はたくさん見てきたが、雄弁な人は一人もいなかったと言っているのです[25]。明らかに彼の心の中には、実際には見たことがないけれども精神によって認識した雄弁の理想像がありました[26]。鋭敏な洞察力によって彼は、――実際、洞察力の鋭い人物でした――自分にも他人にも多くのことが欠如していて、真に雄弁家と呼ぶことのできる人が一人もいないことに気づいたのです。19　もし彼が自分をもルーキウス・クラッスス[27]をも雄弁家だとみなさなかったならば、それは、彼が精神を働かせて、何も欠けるところがない雄弁のあるべき姿を把握していたからであり、一つないし多くの点で欠けている人たちを、あの弁論家のあるべき姿だとはどうしてもみなすことができなかったからなのです。そういうわけですから、ブルートゥスよ、できるならばわれわれは、アントーニウスが見ることのなかった人物を、そしてこれまで一人として存在しなかった〔理想の弁論家という〕人物を探究することにしましょう。〔理想の弁論家という〕この人物を真似たり描写したりすることはできないとしても、これは神にもほとんど不可能だとアントーニウスが言っていましたが、しかし理想の弁論家がどのような性質を持つべきかを述べることはできるかもしれません。

弁論の三つの種類、いわゆるアッティカ主義

20　弁論の種類には全部で三つあります[28]。それら三つのうちのどれか一つに秀でた人はいましたが、われわれが望んでいること、つまり、それらすべてに等しく秀でた人はほとんどいませんでした。大言壮語する[29]弁論家たちは、大言壮語と言ってよければの話ですが、内容の大いなる重厚さと言葉の威厳[30]を持ち、激しく、変化に富み、豊富で、重々しく、聴衆の心を動かし変化させる訓練を受け、そうしたことに熟達しています[31]。――ある人たちは完全文[32]や総合文[33]を用いることなく、荒々しく[34]陰鬱で[35]粗野な[36]弁論によってこれを達成し、ある人たちは、なめらかで[37]整えられて[38]終結する[39]弁論によってこれを達

成していました[40]。――これと対極にあるのが簡素で[41]鋭い[42]弁論家たちであり、彼らは、平明で[43]引き締まり[44]磨き上げられた[45]弁論でもって事態をすべて説明し、誇張するのではなくより明白なもの[46]にするのです。VI　この同じ種類には、巧みだ[47]が磨かれていない[48]弁論家たちがいます。彼らは、わざと粗野で未熟な話し手を真似るのです。また、同じく無味[49]ながらも、より均整のとれた[50]弁論を用いる人たちもいます。彼らは、機知に富み、少しばかり飾りたてることで輝かしくさえします[51]。21　以上の二つの間に、いわば穏やかな中間の弁論家がいます。彼は、後者の鋭さ[52]も、前者の流麗さ[53]もなく、また両者に近いようでいて、どちらと比べても秀でていず、さらに両者に関係しているようでいて、本当のことを言うと、どちらにも関係していないのです。彼は、いわば一本調子で話が流れていき、容易さ[54]と単調さ以外何ももたらしません、あるいはせいぜい花冠を束ねる紐のように〔一定の間隔で〕結び目を添え、内容と言葉の適度な飾りで弁論全体を際立たせるのです[55]。

22　これら三つの種類のうちどれか一つに力を発揮した人たちは、弁論家として偉大な名声を獲得しました。しかし問われるべきは、彼らが私たちの探していることを充分に成し遂げたのかということです。　VII　もちろん、装飾豊かに重々しく語る人がいたこと、また巧妙で精緻に語る人がいたことを私たちは知っています。願わくは、ローマ人の中にこうした弁論家の例を見つけることができますように。外国人の中に見つけるよりも、自国人で満足するほうが名誉なことでしょう。23　しかし私自身は、『ブルートゥス』で描いたわれわれの対話において、一つには他の人たちを勇気づけるために、一つには私がローマ人を愛しているゆえにローマ人に賛辞を惜しまなかったのですが、思い出すに、ただ一人デーモステネースを他のすべての人たちよりもはるかに重んじました。そして他の弁論家の中に私自身が見てとった弁論にではなく、私が考えているあの理想の弁論に、デーモステネースを当てはめようとしました。彼よりも重々しく、より巧みで、より穏やかな者は一人もいませんでした。したがって思うにわれわれは、流布している誤った見解を持ち、アッティカ主義と呼ばれることを望む人たちに、あるいはアッティカ風に語っていると主張する人たちに、思うに女神アテーネーと同じくらいアッティカ風だった人を[56]最も尊敬すべきであると忠告しなければなりません。24　今日、人は各々自分が真似できると思うことだけを賞賛します[57]。ところが、こうした連中は高い野心と不確かな判断力の持ち主であって、彼らに、アッティカの弁論家たちの真の功績がどのようなものかを教えるのも不適切なことではないと思います。

本当のアッティカ主義

VIII　弁論家の雄弁の尺度はいつも、聴衆の思慮分別でした。というのも、賞賛されたい

と思う人たちは皆、聴衆の意向を考慮して、聴衆の意向、ならびに聴衆の意見と賛同に合わせて、自らを作りあげ適応させるのです。25　こういうわけで、カーリアやプリュギアやミューシアの人々[58]は、優雅でも上品でもないので、彼らの耳にふさわしいいわば太った[59]、いわば油っぽい[60]語り方を取り入れたのです[61]。彼らの隣国であるロドス人たちは、それほど広くない海で隔てられているのですが、この語り方を決して賞賛しませんでした。さらにギリシアはこの語り方をはるかに劣ったものとし、アテーナイ人たちは断固拒絶しました。アテーナイ人たちの判断はいつも洞察力に富み健全だったので、純粋で[62]洗練されたもの以外に耳を傾けることができなかったのです。アテーナイ人たちの実直さに従って弁論家は希語や侮蔑語を用いようとはしませんでした。26　したがって、他の人たちよりも優れていると先に私が述べたかの人〔デーモステネース〕は、『クテーシポーン弁護』というあの最も優れた弁論[63]において、始めのうちは穏やかで、そして法律について論じるときはより引き締まり、その後しだいに裁判官たちの感情をかき立て、彼らが激していると見てとるや、あとは大胆に一気呵成に攻めたのです。ところがアイスキネースは、あらゆる言葉のいわば重さを吟味するというまさにこの点で〔デーモステネースを〕非難し、攻撃し、耳障りで不快で耐えられないと嘲笑しながら断定しています。いやそれどころか、彼を獣と呼んで、それは言葉なのかそれとも怪物なのかと彼に尋ねさえするのです。アイスキネースには、デーモステネースがアッティカ風に語っているとは決して思えなかったのです。27　確かに、こう言ってよければ、言葉が何か燃えあがるようだと批判し、情念の火を消すことになると嘲笑するのはたやすいことです。 そういうわけで、デーモステネースは次のように冗談をいって自らを正当化したのです。ギリシアの運命は、この言葉を遣うか、あの言葉を遣うかにかかっているのではなく、こちらへ手を差し出すのか、あちらへ手を差し出すのかにかかっているのだ、と[64]。デーモステネースですら気取っていると非難されているのに、ミューシア人やプリュギア人だったらアテーナイでの評判はどのようなものになるでしょうか。実際、もし彼らが高い声で叫びながらアッティカ風に歌い始めたなら、誰が我慢できるでしょうか。いやむしろ、「消え失せろ」と命じないでいられるでしょうか。

IX　28　したがって、アッティカの人たちの繊細で実直な耳に自らを適合させる人こそ、アッティカ風に話すと評価されるべきなのです。この種類はたくさんありますが[65]、彼らは[66]、それがどのようなものなのかを一通りにしか理解していません。すなわち彼らは、粗野で洗練されていない風に語る人がいるとしても思想内容を正確で明確にした上でそうした語り方をしているならばその人を唯一アッティカ風に話すと見なしているのです。唯一とする点で彼らは間違っていますが、アッティカ風だとする点で彼らは間違っていません。29　すなわち、もしこれだけがアッティカ風だとするならば、彼らの判断ではペリクレースすらアッティカ風に語っていなかったことになりますが、しかしペリクレースに第一等が与えら

れてきたのは異論のないところです。もしペリクレースが簡素な文体を用いたならば[67]、詩人のアリストパネースも、彼が「閃光を発し、雷鳴を轟かせ、ギリシア全体を混ぜ返した」[68]とは言わなかったでしょう。したがって、最も優雅で洗練された著述家であるかのリューシアースはアッティカ風に話していたということにしましょう[69]。——このことを誰が否定できるでしょうか。——ただし、リューシアースがアッティカ風だとみなされるのは、簡素で飾らない点にあるのではなく、風変わりなところもなく不適切なところもないという点にあるとわれわれが理解している限りにおいてです。さらに、装飾豊かに、荘重に、豊かに語ることも、アッティカの弁論家たちのものであるとすべきでしょう。さもなければ、アイスキネースもデーモステネースもアッティカの弁論家でないとすべきでしょう。30　さてここでトゥーキューディデースの模倣者を名乗る人たちのご登場です[70]。これはものを知らない人たちに属するもので、これまで聞いたことのない新しい種類です[71]。リューシアースに従う人たちは、少なくともある意味で弁護士に従っているのですが、その弁護士は、大いなる重厚さを持ち合わせていませんが、精緻で洗練されていて、法廷においては一歩も引かないことで有名なのです。これに対して、トゥーキューディデースはわれわれに歴史を、戦争を、戦闘を、なるほど重厚かつ高潔に語りますが、しかし彼の中には法廷の弁論や公の弁論へ応用できるものは何もないのです。集会の弁論自体にも不明瞭で謎めいた文が多く認められ、ほとんど理解することができないのです。これは、公の弁論においてはまさに最大の欠点になります。31　農業が発明されても木の実を主食として生活するほどの人間の頑迷さはどのようなものでしょうか。あるいは、アテーナイ人たちの援助によって改善できたのは人間の食物であって、弁論ではないということでしょうか。さらに、トゥーキューディデースから例を引いた人がギリシア人の弁論術教師たちの中に誰かこれまでいたでしょうか。とはいえ、トゥーキューディデースはあらゆる人から賞賛されてきました。そのことは私も認めます。しかしそれは、トゥーキューディデースが色々な出来事を知的で厳格にして重厚に説明する者である限りでのことなのです。彼の目的は、法廷において案件を扱うことではなく、歴史書において戦争を語ることです。32　そういうわけでトゥーキューディデースが弁論家として数えられることは決してなかったのです。本当のところを言うと、彼が歴史を書かなかったら、たとえ貴族の生まれで国政に携わっていたとしても、彼の名前は残らなかったでしょう。実際、トゥーキューディデースの言葉の重厚さと内容の重厚さをうまく真似た人はいませんでした。ただ細切れでまとまりなく話すとき人は自分をトゥーキューディデースの兄弟だと見なすのです。さらに私は、クセノポーンのようになりたいと望む人にも出くわしました。確かにクセノポーンの文章は蜂蜜よりも甘いのですが、しかし公共広場の喧騒からは最もかけ離れたものなのです。

注

1) 6節でも同義のことが言われている。クインティリアーヌスはこの文を『弁論家の教育』第12巻11章26節で引用している。

2) 底本では「an」となっている。底本に従わず「nam」と読む。

3) 叙事詩、イアンボス詩、悲劇、抒情詩の順にそれぞれのジャンルを代表する詩人が挙げられている。

4) 前4世紀のギリシア人プロートゲネースの作品。イアーリュソスは太陽神の息子で、ロドス島の町イアーリュソスの創建者。キケローは前50年にロドス島を訪ねている。『ブルートゥス』1節(「シリキアを去りロドス島に来て、そこで私はクイントゥス・ホルテンシウスの訃報を受け取ったとき、人々が思っている以上に私は悲しみに打ちひしがれた(Cum e Cilicia decedens Rhodum venissem et eo mihi de Q. Hortensi morte esset allatum, opinione ominium maiorem animo cepi dolorem.)」を参照。ブルートゥスはおそらく前53年にロドス島に立ち寄っている。

5) 前4世紀のギリシア人アペッレースの作品。アスクレーピオス神殿に捧げられた。キケローはこの像を美の基準にしている。『神々の本性について』第1巻75節、『義務について』第3巻10節、『縁者・友人宛書簡集』1. 9. 15を参照。プリーニウス『博物誌』35・92では、この像は未完であると言われている。

6) 前5世紀のアテーナイの彫刻家ピーディアースの作品。

7) ドリュポロス像は槍を持つ人の像のこと。前5世紀ギリシアのポリュクリートスの作品。

8) 4節でも同義のことが言われている。同種の表現は、『ブルートゥス』173節「したがって、クラッススとアントーニウスの二人が最高で、ルーキウス・ピリップスが次に来るのだが、その間には長い間隔があっての次席である(Duobus igitur summis, Crasso et Antonio, L. Philippus proximus accedebat, sed longo intervallo tamen proximus.)」。ウェルギリウス『アエネーイス』第5歌320行(proximus huic, longo sed proximus intervallo,)、クインティリアーヌス『弁論家の教育』第10巻1章53節を参照。ペトラルカは『わが秘密』(第2巻5)で、第2位がなければ第1位はないと言っている。

9) 底本の「〜ない(non)」を削除する。この文章は、「〜ない(non)」を不要と見なして削除するか、そのまま残しておくかで意見が分かれる。そのまま残しておくと次のような訳になる。「姿と形において完全にして卓越したものがあり、その理念的な像を参照することで、それ自体目に見えないものが、作り出されるのです。」cf. Sandys, p. 10 f. note on 'cadunt'. 理念的な像(species)と現実の像(effigies)が対比されていると考えられる。

10)「哲学(intellegendi)のみならず弁論の(dicendi)」において、哲学と弁論が対になって使われている。哲学はδιαλεκτικῆς に相当し、弁論はῥητορικῆς に相当する。これら二つから論理学(λογική)が成り立つ。Διαλεκτική は disserendi とも訳される。『弁論家について』第3巻73節、『アカデーミカ』第1巻5節、『トピカ』6節を参照。しかしδιαλεκτικῆ は哲学だけのものではない。たとえば

『弁論家』44 節、46 節、『トピカ』51 節では対話術は弁論術に属する。

11)「知性と理性に（ratione et intellegentia）」については、キケロー訳のプラトーン『ティーマイオス』3 節を参照。そこでは以下のように言われている。「常に存在し、始めも持たず、生成して存在することもないものは何か。それらのうち、一つは知性と理性によって把握されるものであり、それは常に同一であるものである。もう一つは思惑が、そして理性を欠いた感覚がわれわれにもたらすものであり、まったく想像に基づくものである。それは生成し、消滅し、真にあるということが決してないものである（Quid est, quod semper sit neque ullum habeat ortum, et quod gignatur nec umquam sit? Quorum alterum intellegentia et ratione comprehenditur, quod unum atque idem semper est; alterum, quod adfert opinio et sensus rationis expers, quod totum opinabile est, id gignitur et interit nec umquam esse vere potest.）」。プラトーンは、イデアーを見ることはできないが、知性によって理解すると言っている。『国家』第 6 巻 507B を参照。キケローは理想的な弁論家は理念的に語るしかないと主張し、プラトーンのイデア論を援用する。しかしキケローの言う理想的な弁論家は普遍的でも不変的でもない。

12)「理論と方法にしたがって（ratione et via）」はアリストテレースの術語「μεθοδῷ」のラテン語訳である。「方法論にしたがって」と二語一義に訳すこともできる。『善と悪の究極について』第 2 巻 3 節「しかし、哲学的な探究においては、ある一定の方法と理論によって進められる弁論はすべてまず前文を持っていなければならない（Ominis autem in quaerendo quae via quadam et ratione habetur oratio praescribere primum debet,）」、『弁論家について』第 1 巻 87 節「弁論の理論と方法を（dicendi rationem ac viam）」、『トゥスクルム荘対談集』第 2 巻 6 節「理論と方法によって哲学する（ratione et via philosophantur）」、『ブルートゥス』46 節「すなわち以前は、方法ないし技術にしたがって語ることを習慣とする人はいなかった、多くの人々は、注意深くではあるがしかし手順通りに語っていた（nam antea neminem solitum via nec arte, sed accurate tamen et discripte plerosque dicere）」を参照。

13)「原型（forma）」は「像（species）」と同じ意味で用いられている。ここでは理想像、イデアーのことを意味している。しかしキケローにおいて、これらの二つの言葉は必ずしもイデアーを意味するわけではない。たとえば『トピカ』30 節以降「分割には種（forma）がある。これをギリシア人たちはエイデーと呼ぶ。われわれがたまたまこれを話題にするときわれわれは種（species）と呼んでいる。（in divisione formae, quas Graeci εἴδη vocant, nostri, si qui haec forte tractant, species appellant,）」を参照。

14) アカデーメイアはプラトーンがアテーナイに開いた学校。ラテン語ではアカデーミーアと言われる。「弁論術の教室」と「アカデーメイアの広場」が対照されている。「当然有名なあのアカデーメイアの歩道に私たちが着いたとき、私たちが望んだ静寂があった（Cum autem venissemus in Academeiae non sine causa nobilitata spatia, solitudo erat ea quam volueramus.）」キケロー『善

と悪の究極について』第5巻1節。クインティリアーヌス(『弁論家の教育』第12巻2章23節)は、アカデーメイアの教育に多くを負っているというキケローの言葉を伝える。またクインティリアーヌス『弁論家の教育』第10巻第1章35節も参照。

15)「より田舎風のムーサたちに(agrestioribus Musis)」とは、洗練されていないムーサたちの意味。これと同じ表現はプラトーンやギリシアの哲学者たちの中に見つけることはできない。プラトーン『パイドロス』(229E)に「何か田舎風の知恵を用いて(ἀγροίκῳ τινὶ σοφίᾳ χρώμενος)」という表現がある。『弁論家について』第2巻1節では「田舎くさいと君が思っている弁論術書に(rhetoricis...libris quos tu agrestis putas)」と言われている。他に「田舎の(agrestis)」という形容詞が用いられている箇所は、『弁論家について』第1巻33節、115節、第3巻42節、227節、『ブルートゥス』83節、『弁論家』43節、51節である。

16)キケロー『弁論家について』第1巻18節では「俳優たちの些細な技術が(historionum levis ars)」と、129節では「じつにつまらない些細な学芸において(in artificio perquam tenui et levi)」と言われている。またウェルギリウス『農耕詩』第4歌176行には「もし小さいことを大きなことと比較するのが許されるのならば(si parva licet componere magnis)」とある。

17)プラトーン『パイドロス』269Eを参照。ペリクレースがアナクサゴラースの講義を聞いていたことについては『ブルートゥス』44節でも次のように言われている。「しかしほとんど同じときに、クサンティッポスの息子であるペリクレースは、先にも言及したのだが、初めて理論を用いた。その理論は当時まだ弁論の理論ではなかったけれども、自然学者のアナクサゴラースによって教育されたペリクレースは精神の鍛錬を、曖昧で難解な事柄から、法廷と民会の案件へと容易に変えたのである。彼の雄弁の魅力にアテーナイは歓喜し、彼の雄弁の豊かさと豊富さを賞賛し、彼の弁論の恐るべき力を恐れた(Sed tum fere Pericles Xanthippi filus, de quo ante dixi, primus adhibuit doctorinam; quae quamquam tum nulla erat dicendi, tamen ab Anaxagora physico eruditus exercitationem mentis a reconditis abstrusisque rebus ad causas forensis popularisque facile traduxerat. Huius suavitate maxime hilaratae Athenae sunt, huius ubertatem et copiam admiratae, eiusdem vim dicendi terroremque timuerunt.)」。

18)デーモステネースのこの書簡は現存しない。デーモステネースの第5書簡にプラトーンの学園への言及がある。しかしデーモステネースの書簡集自体も偽作だと考えられている。『ブルートゥス』でもキケローはこの書簡を典拠にして、デーモステネースの弁論がプラトーンの哲学に負っていると主張している。『ブルートゥス』121節「デーモステネースは生徒であったときですらプラトーンを熱心に読んでいたと言われている。そしてそれは、彼の性格と語彙の荘重さからも明らかである。実際、彼自身も手紙の中で自らについてそう述べている(Lectitavisse Platonem studiose, audivisse etiam Demosthenes dicitur—idque apparet ex genere et granditate verborum; dicit etiam in quadam epistula hoc ipse de sese—)」。デーモステネース(前384?—322)とプラトーン(前

427?—347?）の組み合わせは、ペリクレース（前 490?—429）とアナクサゴラース（前 500?—428）の組み合わせに相当する。こうした組み合わせは、クインティリアーヌス『弁論家の教育』第 12 巻 2 章 22、タキトゥス『弁論家についての対話』32 にも見られる。

19）この文章は、哲学のうち対話術（dialectic）について言及したものである。次に続く文章は、自然学と倫理学に言及したものである。対話術への言及の中で出てきた「種と類」、「定義」、「分割」、「帰結」、「矛盾」については、『トピカ』11 節から 23 節を参照。

20）「語ったり考えたり」は、弁論の部門である「措辞」と「発想」に相当する。

21）ここまでの文章をどう読むかは校訂者により異なる。たとえば Hubbell（Loeb）は、次のように読む。「弁論家に豊富な題材を提供する自然学について、私は何を言うべきでしょうか。それとも君は、人生について、義務について、徳について、死について、これらの事柄について十分な訓練も受けずに、語ったり考えたりすることができるとでも君は思っているのですか。」16 節は、哲学、自然学、倫理学について順に言及していると思われる。

22）哲学と弁論術が分かれていた時代のことが述べられている。ここでキケローが念頭に置いているのはプラトーンの哲学、特に『パイドロス』であろう。

23）『弁論家について』第 3 巻 84 節では「人間たちのところでは最高の弁論家であることほど困難で、遠大で、学問の多くの助けを必要とするものはない（neque enim apud homines res est ulla difficilior neque maior neque quae plura adiumenta doctrinae desideret.）」と言われている。

24）マルクス・アントーニウス（前 143—87）は弁論家。前 99 年に執政官。キケローが理想とした弁論家ルーキウス・リキニウス・クラッスス（前 140—91）と同時代人。『弁論家について』の登場人物でもある。孫は、第 2 回三頭政治でローマを支配したマルクス・アントーニウス。『ブルートゥス』163 節では、「弁論の理論についてのこの全く小さな冊子以外にもアントーニウスには何か書いて欲しかった、またクラッススはもう少したくさん書いても良かったのではないかと私は思う。（vellem aliquid Antonio praeter illum de ratione dicendi sane exile labellum, plura Crasso libuisset scribere）」と言われている。

25）キケローは「弁が立つ（disertus）」と「雄弁な（eloquens）」を区別している。『弁論家について』第 1 巻 94 節では次のように言われている。「したがって、彼の考えに導かれて、私も小著を書いた。その小著は私の知らない間に不本意にも出回り、人々の手に行き渡ってしまったのだが、この中で私は、弁が立つ人は少なからず知っているが、雄弁な人はこれまで一人として知らないのであって、それというのも、私が弁が立つとみなすのは、普通の人々の前で人々のある種の常識に基づいて十分に明敏にそして明瞭に語ることのできる人であり、そして私が雄弁だとみなすのは、自分が選んだ主題を人よりも驚くべき仕方で人よりも立派に誇張し飾ることができ、弁論に関係するすべての事柄のすべての源泉を精神と記憶によって保持している人のことであるからだ、と記した（Itaque ego hac eadem opinione adductus scripsi etiam illud quodam in libello, qui me imprudente et

invito excidit et pervenit in manus hominum, disertos cognosse me non nullos, eloquentem adhuc neminem, quod eum statuebam disertum, qui posset satis acute atque dilucide apud mediocris himines ex communi quadam opinione hominum dicere, eloquentem vero, qui mirabilius et magnificentius augere posset atque ornare quae vellet, omnisque omnium rerum, quae ad dicendum pertinerent, fontis animo ac memoria contineret.)」。クインティリアーヌス『弁論家の教育』第8巻序13節、第1巻10章8節も参照。「disertus」の語源については、Sandys (1885) 19-20 note on in eo libero, Wilkins (1892) 128 note on disertos を参照。

26) 9節を参照。

27) ルーキウス・リキニウス・クラッスス(前140—91)は弁論家。前95年に執政官。『弁論家について』の登場人物。

28) 弁論の三種類については、『弁論家について』第3巻177節で、「そういうわけで、われわれの弁論は、ある場合には荘重なものになり、ある場合には精緻〔平明〕なものになり、ある場合にはいわば中間のものになる。こうして、弁論の種類は、われわれが意図した思想〔内容〕に従い、聴衆の耳の快楽すべてと心の情動すべてに応じて変化し変形するのである。(Itaque ut tum graves sumus, tum subtiles, tum medium quiddam tenemus: sic institutam nostram sententiam sequitur orationis genus idque ad omnem aurium voluptatem et animorum motum mutatur et vertitur.)」と言われている。『最も優れた種類の弁論ついて』2節では次のように言われている。「もし誰かある人が、弁論家たちのより多くの種類を数え上げ、ある弁論家たちは荘重で、重厚で、豊かであり、ある弁論家たちは簡素で平明で簡潔であり、ある弁論家たちは両者の中間にあり、いわば中庸であると判断するならば、その人は、弁論家という人間については何かしらのことを語っているが、弁論の内容についてはほとんど何も語っていないのである(Oratorum autem si quis ita numerat plura genera, ut alios grandis aut gravis aut copiosos, alios tenuis aut subtilis aut brevis, alios eis interiectos et tamquam medios putet, de hominibus dicit aliquid, de re parum.)」。『弁論家について』第3巻199節では三種類の美質について次のように言われている。「弁論の装飾に関係すると私が判断したことをほとんどすべて、私の力の及ぶ限りほぼ説明した。というのも私は、一つ一つの単語の美質について、単語の組み合わせの美質について、リズムと文体について語ったからである。しかしもし君が弁論の特徴や何か色合いといったものについて尋ねるならば、豊麗であるがしかしなめらかなものがあり、簡素であるが活力と力強さを失っていないものがある。そしてこれら二つのいずれにも関与するものはいわばその中庸という性質ゆえに賞賛される。これら三つの種類の内になければいけないのは、快楽のための化粧として塗られた色彩ではなく、いわば血液によって身体中に運ばれた色彩である(Exposui fere, ut potui, quae maxime ad ornatum orationis pertinere arbitrabar. Dixi enim de singulorum laude verborum, dixi de coniunctione eorum, dixi de numero atque forma; sed si habitum etiam orationis et quasi colorem aliquem requiritis, est et plena

quaedam, sed tamen teres, et tenuis, non sine nervis ac viribus, et ea, quae particeps utriusque generis quadam mediocritate laudatur. His tribus figuris insidere quidam venustatis non fuco inlitus, sed sanguine diffusus debet color.)」。いわゆる文体を三つに分けることは、アリストテレースの『弁論術』には見られない。それは、テオプラストスの亡失著作『文体論』によるとされている。この点については、ハリカリナッソスのディオニューシオス『デーモステネース論』を参照。クインティリアーヌスも同様に文体を三つに分ける。『弁論家の教育』第12巻10章58節を参照。伝キケロー『ヘレンニウスへ』においてすでに三文体論が次のように言われている。「したがって三つの種類がある。それをわれわれは姿と呼んでいる。弁論はすべて、不完全なものでなければ、これら三つのどれかに分類される。すなわち、一つを荘重な、もう一つを中間の、三つ目を平明なとわれわれは呼ぶ。(Sunt igitur tria genera, quae genera nos figuras appellamus, in quibus omnis oratio non vitiosa consumitur: unam gravem, alteram mediocrem, tertiam extenuatam vocamus.)」(『ヘレンニウスへ』第4巻11節)。しかしながらキケローは『ブルートゥス』201節では弁論には二種類しかないと主張している。「したがって良き弁論、これをわれわれは探究しているのですが、良き弁論には二つの種類、すなわち平明にして簡潔なものと高潔にして豊富なものがある以上は、たとえより輝きより豪華なもののほうが良いとしても、良き弁論には二種類あるので二種類のうちの最高のものがすべて賞賛されるのが正当である。(Quoniam ergo oratorum bonorum—hos enim quaerimus—duo genera sunt, unum attenuate presseque, alterum sublate ampleque dicentium, etsi id melius est quod splendidius etmagnificentius, tamen in bonis omnia quae summa sunt iure laudantur.)」『ブルートゥス』201節。さらに四つの文体が主張されることもある(デメトリオス『文体論』を参照)。

29)「大言壮語する(grandiloqui)」は、「荘重に語る」という意味で用いられている。しかし、『トゥスクルム荘対談集』第5巻89節で「大言壮語する(grandiloqui)ストア派の人々」と言われ、良い意味で用いられていない。『弁論家』191節でも、通常は悪い意味で遣われる「高雅な、大言壮語の(magniloquentia)」という言葉が用いられている。

30)「思想の大いなる重厚(ampla sententiarum gravitate)と言葉の威厳(majestate verborum)」。「大いなる(ampla)」については30節と97節を参照。「思想の重厚(sententiarum gravitate)と言葉の威厳(majestate verborum)」については『ヘレンニウスへ』第4巻11節「もし一つ一つ内容に、適切であろうと外から持ってきたものであろうと最も装飾の多い言葉を見つけることができ、そうした言葉を一つ一つの内容へ適合させるならば、そしてもし拡充法と憐憫喚起とに結びつく重大な思想が選ばれるならば、そしてもし重厚さを持つ思想の装飾や言葉の装飾が、これについては後で述べるが、利用されるならば、弁論は荘重な様式になる(In gravi consumetur oratio figura, si, quae cuiusque rei poterunt ornatissima verba reperiri, sive propria sive extranea, ad unam quamque rem adcommodabuntur; et si graves sententiae, quae in amplificatione et

commiseratione tractantur, eligentur; et si exornationes sententiarum aut verborum, quae gravitatem habebunt, de quibus post dicemus, adhibebuntur.)」を参照。

31)「激しく（vehementes)、変化に富み（varii)、豊富で（copiosi)、重々しく（graves)、聴衆の心を動かし変化させる訓練を受け、そうすることに熟練しています（ad permovendos et convertendos animos instructi et parati)」については、『弁論家について』第2巻211節「あらゆる方法で聴衆の心を動かし変化させるために弁論家によって採用されるこの種の弁論は、気迫のこもった激しいものでなければならない（haec（pars orationis), quae suscipitur ab oratore ad commutandos aminos atque omni ratione flectendos, intenta ac vehemens esse debet.)」を参照。

32)「完全文（perfecta)」は総合文・周期文と同義である。いくつかの節が互いに密接に繋がり合い、全体として一つのまとまりある思想を作り、完結する文のこと。ギリシア語でペリオドス（περίοδος）と呼ばれていた。ペリオドスも、総合文、周期文、掉尾文などと訳される。ラテン語ではペリオドスを作ることを「完全にする（perficio)」と表現する。168節、178節、182節を見よ。また『弁論家について』第3巻175節では「そのさい最も重要なことは、単語と単語の組み合わせによって弁論の中に韻律ができるならばそれは悪であるということであり、とはいえしかしわれわれは、この組み合わせがあたかも韻文のようにリズミカルに終結し、適合し、完全になることを望むのである。(In quo illud est vel maximum, quod versus in oratione si effecitur coniunctione verborum, vitium est, et tamen eam coniunctionem sicuti versum numerose cadere et quadrare et perfici volumus.)」と言われている。

33)「総合文（conclusa)」は、「終わらせた」という意味で、文章を締め括ること。「完全文」と同義である。170節、171節、177節、200節、220節、230節、231節を参照。名詞 conclusio［結び］については、169節、178節、212節を、また『弁論家について』第2巻34節を参照。ホラーティウス『風刺詩』第1巻4歌40行を参照。Ambitus［循環］もギリシア語のペリオドスの訳語である。Ambitus については38節と204節を参照。

34)「荒々しくて陰鬱で粗野な文（aspera tristi horrida oratione)」。aspera は τραχύς の訳語。『弁論家について』第1巻227節で「マルクス・カトーがローマ国民の前で荒々しく激しい口調で演説を行ったとき（cum M. Cato ... aspere apud populum et vehementer esset locutus)」と言われている。これは文体というよりもむしろ口調への批評である。文体を表す「荒々しい（asper)」は「穏やかな（lenis)」と対立する。クインティリアーヌス『弁論家の教育』第6巻3章27節、第8巻6章62節、ハリカリナッソスのディオニューシオス『文章構成論』を参照。

35)「陰鬱な（tristis)」は『ブルートゥス』113節では、「ところでルティリウスはある種陰鬱で地味な文体に固執している（Rutilius autem in quodam tristi et severo genere dicendi versatus est.）と言われていて、「厳正な（severus)」とほぼ同じ意味で用いられている。クインティリアーヌス『弁論家の教育』第12巻10章80節を参照。クインティリアーヌス『弁論家の教育』第8巻3章49節

では「陰鬱な（tristi）」が「陽気な（hilaris）」と対比されている。

36）「粗野な（horrida）」は、「麗々しい（nitida）」の対義語。36 節では絵画について、「絵画においては、荒削りで洗練されていず隠されて暗いものを好む人もいれば、麗々しく華々しい煌びやかなものを好む人もいる（in picturis alios horrida inculta, abdita et opaca, conta alios nitida laeta collustrata delectant:）」と言われている。

37）「なめらかで（levi）」は「荒々しい（aspera）」の対義語である。『弁論家について』第 3 巻 171 節、172 節、201 節を参照。ギリシア語の leios（λεῖος）に相当する。デメトリオス『文体論』48 節と 176 節を参照。

38）「整えられた（structa）」）は、完全文［総合文、周期文、掉尾文、ペリオドス］がうまく構成されていることを言い表している。完全文とほぼ同義。140 節、149 節、219 節、232 節を参照。また『ブルートゥス』274 節「ルーキーリウスが言うように、いわばモザイク模様の石のように、どの場所でも言葉が整えられているのを君は見ただろう（nullum nisi loco positum et tamquam in vermiculato emblemate, ut ait Lucilius, structum verbum videres）」。また『弁論家について』第 3 巻 125 節、171 節を参照。完全文については、注 32 と 33 を見よ。

39）「終結する（terminata）」は、完全文［総合文、周期文、掉尾文、ペリオドス］がうまく終結していることを言い表している。198 節、199 節、『弁論家について』第 3 巻 183 節を参照。名詞「終結、結句（terminatio）」については 200 節を参照。

40）「大言壮語する」弁論家には二つの種類があるということ。次の文章では、「簡素な」弁論家にも二つの種類があるとされている。

41）「簡素な（tenues）」は、「平明な」とも訳される。ギリシア語の ἰσχνός（デメトリオス『文体論』190 節）、λιτός（アリストテレース『弁論術』第 3 巻 16 章 1416b25）、ἀφελής（アリストテレース『弁論術』第 3 巻 9 章 1409b13, 16）に相当する。「荘重な」と対立する。残る三つ目は、「荘重な」と「簡素な」との間にある「中間の」である。81 節には「簡素な弁論家（ille tenuis orator）」という表現がある。

42）「鋭い、鋭敏な（acuti）」、及び「鋭さ・鋭敏（acumen）」については、84 節、99 節、110 節を参照。鋭さや鋭敏さは理性に訴えかける。クインティリアーヌス『弁論家の教育』第 12 巻 10 章 59 節を参照。

43）「平明な（subtilis）」は、一般には「薄い、細い、精巧な、精緻な」という意味で、語り方については「平明な、簡素な」という意味で用いられる。78 節を参照。また『弁論家について』第 1 巻 180 節「市民法の学識においては誰よりも博識の人で、才能と知恵において最も鋭敏であり、弁論において最も磨き抜かれた精緻な人、いつも私が言っているように、市民法に通暁した人の中で最も雄弁な人（homo omnium et disciplina iuris civilis eruditissimus et ingenio prudentiaque acutissimus et oratione maxime limatus atque subtilis atque, ut ego soleo dicere, iuris peritorum

eloquentissimus)」、第2巻10節「君の弁論ほど平明なもの、あるいは華麗なものがありえるだろうか(Quid enim tua potest esse oratione aut subtilius aut ornatius?)」、34節「密集した鋭敏な見解よりも精緻なものが何かあるか(Quid autem subtilius quam crebrae acutaeque sententiae?)、98節「一人は、最も鋭敏で最も平明な弁論の方法を身につけた(alter acutissimum et subtilissimum dicendi genus est consecutus)」、第3巻31節「一人は磨き抜かれた平明な弁論で、適切で的確な言葉で事態を解き明かし(limatus alter et subtilis, rem explicans propriis aptisque verbis)」、66節「さらに次の点がつけ加わる、彼らはなるほどおそらくは平明で鋭敏な弁論の方法を身につけているが、しかし弁論家としては、貧しく、奇妙で、普通の人の耳には聞きなれない、中身のない、貧相な、それでいて民衆に向けて用いることのできないような類の方法を身につけているのである(Accedit quod orationis etiam genus habent fortasse subtile et certe acutum, sed, ut in oratore, exile, inusitatum, abhorrens ab auribus vulgi, obscurum, inane, ieiunum, ac tamen eius modi, quo uti ad vulgus nullo modo possit:)」、177節「そういうわけで、われわれは、ある場合には荘重なものとなり、ある場合には平明なものとなり、ある場合にはいわば中間のものになる(Itaque ut tum graves sumus, tum subtiles, tum medium quiddam tenemus:)」

44)「引き締まった(pressa)」は、「簡潔な、緻密な」という意味。26節を参照。副詞「引き締めて、正確に(presse)」については117節を参照。『弁論家について』第2巻96節「もしわれわれのスルピキウスがそうしていれば、彼の弁論はもっと引き締まったものになっていたのに(quod si haec noster Sulpicius faceret, multo eius oratio esset pressior)」。『ブルートゥス』201節「したがって良き弁論、これをわれわれは探究しているのですが、良き弁論には二つの種類、すなわち平明にして簡潔なものと高潔にして豊富なものがある以上は、たとえより輝きより豪華なもののほうが良いとしても、良き弁論には二種類あるので二種類のうちの最高のものがすべて賞賛されるのが正当である。(Quoniam ergo oratorum bonorum—hos enim quaerimus—duo genera sunt, unum attenuate presseque, alterum sublate ampleque dicentium, etsi id melius est quod splendidius etmagnificentius, tamen in bonis omnia quae summa sunt iure laudantur.)」、202節「しかし、引き締まった弁論家は、粗末と無味に注意しなければならない(Sed cavenda est presso illi oratori inopia et ieiunitas, amplo autem inflatum et corruptum orationis genus.)」。

45)「磨き上げられた(limita)」については、『弁論家について』第1巻115節、180節、第3巻31節、『ブルートゥス』35節[注69]を参照。ギリシア語のῥινᾶν に相当する。アリストパネース『蛙』901行、ハリカリナッソスのディオニューシオス『トゥーキューディデース論』24、ホラーティウス『詩論』291行を参照。

46)「より明白なもの(dilucidiora)」。79節、124節を参照。『弁論家について』第1巻144節「私は、弁論そのものの飾りについて教えられることを聞いた。そこでは、まず純粋にラテン語で話すように教わる。次に、明確で明白に語るように、そして、飾りをつけて語るように、その後に主題の品

格にふさわしくいわば優雅に語るように教わる。(Audieram etiam quae de orationis ipsius ornamentis traderentur, in qua praecipitur primum, ut pure et Latine loquamur, deinde ut plane et dilucide, tum ut ornate, post ad rerum dignitatem apte et quasi decore;)」。

47)「巧みだ(callidi)」については23節、98節を参照。また以下も参照。キケロー『弁論家について』第1巻48節「というのも、政治全般について大いに論じることもなく、法律や習慣や市民法の知識もなく、人間の本性や性格についての認識も持たずして、以上の事柄について十分に巧みに賢明に語ることはできない。(neque enim sine multa pertractatione omnium rerum publicarum neque sine legum, morum, iuris scientia neque natura hominum incognita ac moribus in his ipsis rebus satis callide versari et perite potest)」、93節「このとき、弁論の学術は存在せず、哲学の領域で博識ある人々によって語られている事柄を認識している人を除いて他に誰もおよそ巧みに語ることも、あるいは豊かに語ることもできないのだと説得されたように私には思われた(Sic mihi tum persuadere videbatur neque artificium ullum esse dicendi neque quemquam posse, nisi qui illa, quae a doctissimis hominibus in philosophia dicerentur, cognosset, aut callide aut copiose dicere)」、109節「これらのことは聡明な熟練者によって気づかれ、記録された(haec ab hominibus callidis ac peritis animadversa ac notata)」、第2巻32節「少なからざる人々が、あるいは練習のおかげで、あるいはある種の慣れのおかげで、より巧みにこれ〔弁論〕を行う(non nulli autem propter exercitationeme aut propter consuetudinem aliquam callidius id faciant)」。またディオニューシオス『リューシアース論』8節、『デーモステネース論』第2章6節を参照。

48)「磨かれていない(impoliti)」は「無教養な、未熟な」という意味であるが、ここではわざとぎこちなく見せていることを言っている。『ブルートゥス』294節「すなわち、私は、君のカトーを、市民として、元老院議員として、司令官として、思慮と注意深さのみならずすべての徳においても抜きん出ている男として賞賛する。しかし彼の弁論については当時にふさわしいものだとして賞賛する。すなわち彼の弁論は、磨かれていずまったく荒削りのままだが、才能のある種の片鱗が認められる。(Ego enim Catonem tuum ut civem, ut senatorem, ut imperatorem, ut virum denique cum prudentia et diligentia tum omni virtute excellentem probo; orationes autem eius ut illis temporibus valde laudo—significant enim formam quandam ingeni, sed admodum impolitam et plane rudem—)」。『弁論家について』第3巻185節「すなわちもし、間断なく永遠に流れ出る饒舌が粗野で洗練されていないと見なされるべきならば、そうした饒舌さが拒絶される原因は何か、それは他でもなく、自然そのものが人間の耳に声を合わせるからである。(Nam si rudis et impolita putanda est illa sine intervallis loquacitas perennis et profluens, quid est aliud causae cur repudietur, nisi quod hominum auribus vocem natura modulatur ipsa?)」。同第2巻133節では「鈍感で無教養な(hebes atque impolitum)」と言われているが、この語句は後代の挿入と見なされている。

49)「無味(ieiunitas)」は、修飾のない無味乾燥な文体のことを意味する。通常は文体の欠点とされる。『ブルートゥス』202節「しかし、引き締まった弁論家は、粗末と無味に注意しなければならない(Sed cavenda est presso illi oratori inopia et ieiunitas, amplo autem inflatum et corruptum orationis genus.)」、285節「しかし、もし磨かれていて、都会風で、優雅でありさえすれば、無味と乾燥と粗末をアッティカ風の文体として数えても、それはひとまず正しい。とはいえ、アッティカ風にはこれら以外にもよりよい性質があるのだから、アッティカの弁論家たちの段階的な変化と不同性と力と多様性を見過ごさないように注意しなければならない(Sin autem ieiunitatem et siccitatem et inopiam, dum modo sit polita, dum urbana, dum elegans, in Attico genere ponit, hoc recte dumtaxat; sed quia sunt in Atticis alia aliis meliora, videat ne ignoret et gradus et dissimilitudines et vim et varietatem Atticorum.)」、『弁論家について』第2巻10節「しかしながら、弁論の理論について議論した人々が良き学芸を知らないが故に著作を非難することがあるが、君にとってこれらの本はそういう類の著作ではないと私は思う(non tamen arbitror tibi hos libros in eo fore genere, quod merito propter eorum, qui de dicendi ratione disputarunt, ieiunitatem bonarum artium possit inludi;)」。

50)「より均整の取れた(concinniores)」については65節を参照。また38節、81節、83節では「優美(concinnitas)」という単語が遣われている。『弁論家について』第3巻100節「このようにすべての事柄において、最大の快楽には嫌悪が隣り合っている。したがって、言論においても同様であるとしてもわれわれは少しも不思議に思わない。すなわち、言論においても、詩人たちからあるいは弁論家たちから話を聞いて、均整の取れ際立っていて装飾豊かで楽しい言論でも、中断がなく、抑制がなく、多様性がないときには、詩であれ弁論であれどれほど明るい色で彩られていても、言論のもたらす喜びは長続きすることができないとわれわれは判定することができるのである。(Sic omnibus in rebus voluptatibus maximis fastidium finitimum est; quo hoc minus in oratione miremur in qua vel ex poetis vel oratoribus possumus iudicare concinnam, distinctam, ornatam, festivam, sine intermissione, sine reprehensione, sine varietate, quamvis claris sit coloribus picta vel poesis vel oratio, non posse in delectatione esse diuturna.)」、第3巻203節「そして主題からの脱線がある。脱線で喜びがもたらされたあとに主題へ戻る仕方は適切で均整の取れたものでなければならないだろう(et ab re digressio, in qua cum fuerit delectatio, tum reditus ad rem aptus et concinnus esse debebit;)」、『ブルートゥス』272節「私は、私の義子であるガイウス・ピーソーよりも才能ある人を容易に挙げることはできないけれども、彼よりも熱意があり勤勉な人を私は知らない。彼は、法廷での弁論、自宅での入念な準備、書くこと、考えることにすべての時間を費やしていた。したがって、走っているのではなく空を飛んでいるように見えるほど瞬く間に上達した。彼の言葉の選び方は洗練されていて適切であり、言葉の配列もいわば周期的である。彼の議論は様々に工夫されていて、確信させるものであり、思想内容も均整の取れた鋭敏なものである。そして身

振りも自然で、技術に裏打ちされているかのように優雅であるが、実際にはそうした技術を認めることはできなく、さらに訓練によってある種の動作が生まれているように見えたのである。(Studio autem neminem nec industria maiore cognovi, quamquam ne ingenio quidem qui praestiterit facile dixerim C. Pisoni genero meo. Nullum tempus illi umquam vacabat aut a forensi dictione aut a commentatione domestica aut a scribendo aut a cogitando. Itaque tantos processus efficiebat ut evolare, non excurrere videretur; eratque verborum et dilectus elegans et apta et quasi rotunda constructio; cumque argumenta excogitabantur ab eo multa et firma ad probandum tum concinnae acutaeque sententiae; gestusque natura ita venustus ut ars etiam, quae non erat, et e disciplina motus quidam videretur accedere.)」。以上の他に「均整の取れた(concinnus)」については、『弁論家について』第2巻81節、280節、第3巻207節、『ブルートゥス』325節を参照。

51)「簡素な」弁論家にも、二つの種類があるということ。注40)を見よ。

52)20節で簡素な語りは「鋭い」と言われている。

53)底本ではfulminiであるが、底本に従わず、flumineと読む。fulminiの複数形fulminaが234節にある。fulmini、fulmenは「稲妻」の意味。flumini、flumenは「洪水」の意味で、言葉がほとばしり流れる様を表している。荘重な語りは、53節でflumenと言われている。また『弁論家について』第2巻62節、188節、『ブルートゥス』325節、『神々の本性について』第2巻20節を参照。

54)「容易さ(facultatem)」については70節、231節を参照。また『ブルートゥス』303節を参照。

55)「際立たせる(distinguo)」については『弁論家について』第1巻218節、第2巻36節、第3巻201節、『発想論』第2巻29節を参照。荘重な語りは装飾を付けて煌びやかにするが、平明な語りは適度な印で弁論を引き立てる。キケローは、それぞれの語りを説明するとき、それぞれの語りにふさわしい言葉を遣っている。

56)デーモステネースのこと。

57)『トゥスクルム荘対談集』第2巻3節を参照。

58)カーリアは小アジアの西南の地域で、ハリカリナッソスの町がある。プリュギアは小アジア中部の地域。ミューシアは小アジアの西北部の地域。

59)「太った(opimus)」は、文の「誇張した、装飾過剰な」を意味する。対義語は「やせた(gracilis)」である。157節「しかしisdemはより正しいが、eisdemはより太っている。isdemは響きが悪い。したがって、美しい音調のために間違いをしてもゆるされるように習慣上なった。(at 'isdem' erat verius, nec tamen 'eisdem' ut opimius. male sonabat 'isdem': impetratum est a consuetudine ut peccare suavitatis causa liceret.)」。また『ブルートゥス』64節では語りの簡素さが身体の細さに例えられて次のように言われている。「すなわち、彼〔リューシアース〕には一定の支持者たちがいる。彼らは、体が太っている状態よりもほっそりしている状態を目指し、健康状態が良ければや

せていることすら彼らは喜ぶ。リューシアースには、他の誰も上げることのできないほどの効果を上げるような筋力さえしばしばあるけれども、しかし彼は全体として見れば他の人よりもやせているのだが、それでも彼には、このまさに細さ［文体の簡素さ］を大いに楽しむ賞賛者たちがいるのだ。(Habet enim certos sui studiosos, qui non tam habitus corporis opimos quam gracilitates consectentur, quos, valetudo modo bona sit, tenuitas ipsa delectat—quamquam in Lysia sunt saepe etiam lacerti, sic uti fieri nihil possit valentius; verum est certe genere toto strigosior—, sed habet tamen suos laudatores, qui hac ipsa eius subtilitate admodum gaudeant.)」。さらに同271節では、過剰な装飾を太ったと形容して、次のように言われている。「したがって、私の友人で最近亡くなったローマの騎士たちを省くわけにはいかない。スポレーティウムのプーブリウス・コーミニウスがガイウス・コルネリウスを訴えたとき弁護を引き受けたのが私だった。彼の弁論は秩序づけられ、鋭く、機敏である。ピサウルムのティツゥス・アッキウスの訴えに応えて私がクルエンティウスを弁護したのであるが、彼は厳密にそして十二分に豊かに語っていた。そしてさらに彼は、ヘルモゴラスの薫陶を受け研鑽を積んだ。ヘルモゴラスの薫陶の下で彼に教えられたのは、弁論の十分に太った豊かな装飾ではなく、軽装兵たちが投げるために槍に紐がついているように、諸案件の一つ一つにいわばぴったりと適合した出来合いの議論であった。(Itaque ne hos quidem equites Romanos, amicos nostros, qui nuper mortui sunt, omittam P. Cominium Spoletinum, quo accusante defendi C. Cornelium, in quo et compositum dicendi genus et acre et expeditum fuit; T. Accium Pisaurensem, cuius accusationi respondi pro A. Cluentio, qui et accurate dicebat et satis copiose, eratque praeterea doctus Hermagorae praeceptis, quibus etsi ornamenta non satis opima dicendi, tamen, ut hastae velitibus amentatae, sic apta quaedam et parata singulis causarum generibus argumenta traduntur.)」。弁論の語りの多様性が身体的な特徴として比喩的に語られている事例については、タキトゥス『弁論家についての対話』21、クインティリアーヌス『弁論家の教育』第10巻1章33節、60節を参照。

60）「油っぽい（adipalis）」は、油っぽい料理を形容する語。「油っぽい（adipatus）」とする読みもある。装飾が行きすぎた文体を意味する。「油の多い（pinguis）」と同じ意味。『アルキアース弁護』26節「油っぽく［装飾過剰］で異国風に語る詩人たちに（poetis pingue quiddam sonantibus atque peregrinum）」、『ルークッルス』109節「アンティオコスにさえ油っぽく［愚かに］思われた（quod ipsi Antiocho pingue videbatur）」。

61）ここからアジア風とアッティカ風が述べられている。一般に、アジア風とアッティカ風の対立とみなされるが、しかしキケローは、ロドス島を三つ目の派閥として記している。キケローはロドス島で修辞学者のモローに教えを受けている。『ブルートゥス』316節「私は彼らに満足せず、ロドス島へ来て、ローマでも聴講したモローに師事した。モローは、実際の訴訟においても卓越した弁護士で、弁論代作者であっただけでなく、欠点を見つけてそれを正し教え導くことにおいても最も熟

達していた。(Quibus non contentus Rhodum veni meque ad eundem, quem Romae audiveram Molonem applicavi cum actorem in veris causis scriptoremque praestantem tum in notandis animadvertendisque vitiis et in instituendo docendoque prudentissimum.)」。

62)「純粋で(incorruptum)」は、「損なわれていない」という意味。『ブルートゥス』36節と132節では次のように言われている。「彼の次に来るのはヒュペレイデースとアイスキネース、リュクールゴスとデイナルコス、著作の残っていないデーマーデースとその他の人々である。この世代は、多産であった。私が思うに、〔弁論の〕体液〔活気〕と血液〔活力〕はこの弁論家たちの世代まで損なわれずにあった。そこには、自然の、人工的でない優雅さがあった。(Huic Hyperides proximus et Aeschines fuit et Lycurgus et Dinarchus et is, cuius nulla exstant scripta, Demades aliique plures. Haec enim aetas effudit hanc copiam; et, ut opinio mea fert, sucus ille et sanguis incorruptus usque ad hanc aetatem oratorum fuit, in qua naturalis inesset, non fucatus nitor.)」36節。「さて、クゥイントゥス・カトゥルスは、昔のやり方ではなく、より完全ではありえないとしても今風の訓練を受けた。多くの読書、生活や性格だけでなく弁論においても最も優雅であること、ラテン語の話し方の損なわれていない健全さである。これらは、彼の弁論からも知ることができるが、また自分の執政官職のことについてと自分の業績について柔らかいクセノポーン風の柔らかい文体で書き記し、友人である詩人アウルス・フーリウスへ捧げた著作からも知ることができる。(Iam Q. Catulus non antiquo illo more, sed hoc nostro, nisi quid fieri potest perfectius, eruditus. Multae litterae, summa non vitae solum atque naturae sed orationis etiam comitas, incorrupta quaedam Latini sermonis integritas; quae perspici cum ex orationibus eius potest tum facillime ex eo libro quem de consulatu et de rebus gestis suis conscriptum molli et Xenophontio genere sermonis misit ad A. Furium poetam, familiarem suum;)」132節。

63)一般に『冠について』として知られている弁論。

64)デーモステネース『冠について』232。

65)『ブルートゥス』285節を参照。注49)を見よ。

66)23節の「誤った見解を持つ」人たちのこと。

67)言葉遣いについては28節を参照。

68)アリストパネース『アカルナイの人々』530行。『弁論家について』第3巻138節で、キケローはペリクレースについて言及している。キケローはかつてこの文句をエウポリスのものとみなしていた。『アッティクス宛書簡集』243(Shackleton Bailey)「「クレーメースよ、そんなにやることがなく暇なのか」、『弁論家』を読んでいるなんて。よくやった。ありがたい。もし君の写字生たちを使って、君が持っている写しだけでなく、他の人たちが持っている写しにも、「エウポリス」とある所を「アリストパネース」に書き換えてくれたら、もっとありがたい('Cheme, tantumene ab re tua est oti tibi,' ut etiam 'Oratorem'legas? macte virtute! Mihi quidem gratum, et erit gratius si non

modo tuis libris sed etiam in aliorum per librarios tuos Aristophanem reposueris pro Eupoli.)」。クインティリアーヌス『弁論家の教育』第2巻16章19節、第12巻10章65節を参照。

69) リューシアースはアテーナイの弁論家。キケローの時代には最も典型的なアッティカの弁論家とみなされていた。キケローは、デーモステネースに次ぐ弁論家として、そして簡素な文体を代表する弁論家としてリューシアースを高く評価している。90節、110節、226節を参照。『ブルートゥス』35節「次に、リューシアース自身は法定の案件には携わることがなかったが、まことに緻密で洗練された著者であった。彼のことを君でも完全な弁論家とあえて呼ぶかもしれない。というのも、何も欠けることのない完全な弁論家といえば、君はためらうことなくデーモステネースを挙げたであろうからである。彼が書いた訴訟弁論の中には、鋭敏さも、言うならば巧妙なものも狡猾なものも見つけることができなかった。彼は、こうしたことを見過ごさなかったのだ。よりいっそう洗練されたものにするための緻密な語りも、簡明な語りも、明確な語りもない。反対に、よりいっそう荘重なものにするための重厚さも激しさも装飾も言葉や内容の荘重さもない。(Tum fuit Lysias ipse quidem in causis forensibus non versatus, sed egregie subtilis scriptor atque elegans, quem iam prope audeas oratorem perfectum dicere. Nam plane quidem perfectum et quoi nihil admodum desit Demosthenem facile dixeris. Nihil acute inveniri potuit in eis causis quas scripsit, nihil, ut ita dicam, subdole, nihil versute, quod ille non viderit; nihil subtiliter dici, nihil presse, nihil enucleate, quo fieri possit aliquid limatius; nihil contra grande, nihil incitatum, nihil ornatum vel verborum gravitate vel sententiarum, quo quicquam esset elatius.)」、64節(注59を参照)、293節「「何のために言っているのだ。君の言っていることは理解できない」と私は言った。すると彼は言った、「まず、君が弁論家を賞賛したのはいいが、それは経験のない者を間違いに導くことになる。アッティカのリューシアースとわれわれのカトーを君が比べた時、私自身は、笑いをこらえ切れそうになかった。確かに優れた人物だ。いや、最高にして唯一の男だ。誰も否定はしまい。しかし弁論家だって? しかもリューシアースに似ている? リューシアースよりも色とりどりであることなどありえないのに。君が冗談で言っているのなら、みごとな皮肉だ」(Quorsus, inquam, istuc? non enim intellego. quia primum, inquit, ita laudavisti quosdam oratores ut imperitos posses in errorem inducere. Equidem in quibusdam risum vix tenebam, cum Attico Lysiae Catonem nostrum comparabas, magnum me hercule hominem vel potius summum et singularem virum—nemo dicet secus—; sed oratorem? sed etiam Lysiae similem? quo nihil potest esse pictius. bella ironia, si iocaremur;)」。また『弁論家について』第1巻231節、第2巻93節「彼ら〔ペリクレース、アルキビアデース、トゥーキューディデース〕の後に続いたのは、クリティアース、テーラーメネース、リューシアースである。リューシアースの著作は多い。クリティアースの著作は少なくはない。テーラーメネースについてはわれわれは聴き知っている。彼らは皆ペリクレースのあの活気をまだ保持していたが、彼よりも少しばかり豊かな性質だった。(Consecuti sunt hos

Critias, Theramenes, Lysias: multa Lysiae scripta sunt; non nulla Critiae; de Theramene audimus; omnes etiam tum retinebant illum Pericli sucum, sed erant paulo uberiore filo.)」、第3巻28節「イソクラテースは甘美を、リューシアースは精緻を、ヒュペレイデースは鋭敏を、デーモステネースは力強さを持っていた。彼らの内に、他の人より優れていない人が誰かいるか。他の人に似ているような人が誰かいるか。(suavitatem Isocrates, subtilitatem Lysias, acumen Hyperides, sonitum Aeschines, vim Demosthenes habuit. Quis eorum non egregius? tamen quis cuiusquam nisi sui similis?)」。さらに『最も優れた種類の弁論家について』9節、10節を参照。

ローマのアッティカ主義者たちはリューシアースを理想の弁論家と見なした。『ブルートゥス』286節「さて実際、互いに似ていないがアッティカ風である二人が同時代にいた。カリシウスは、他の人のために多くの弁論を書いたが、リューシアースを真似しようと願っているように見えた。他方、デーモカレースは、デーモステネースの妹の息子であるが、彼は弁論をいくつか書き、彼の時代にアテーナイで起きた出来事の歴史を歴史の文体というよりも弁論の文体で書き記した。(Et quidem duo fuerunt per idem tempus dissimiles inter se, sed Attici tamen; quorum Charisius multarum oratorium, quas scribebat aliis, cum cupere videretur imitari Lysiam; Demochares autem, qui fuit Demostheni sororis filius, et orationes scripsit aliquot et earum rerum historiam quae erant Athenis ipsius aetate gestae non tam historico quam oratorio genere perscripsit.)」、『弁論家』29節、30節を参照。

70)「ecce autem aliquii se Thucydidios esse profitentur」。喜劇で人物が登場するときの皮肉的な表現が使われている。同様の表現が『弁論家について』第2巻94節にある。

71)トゥーキューディデースは弁論の手本にならないということ。『ブルートゥス』287節「「わたしたちはトゥーキューディデースを模倣します」と彼は言う。それは結構なことだ、君たちが裁判の訴訟を書くのではなく歴史を書こうと思っているならば。トゥーキューディデースは過去の出来事の語り手で、それも誠実で重厚な語り手だ。しかしながら彼は、法廷の弁論も論争の弁論も裁判の弁論も取り扱わなかった。彼が間間に紹介する弁論を、多くあるのだが、私は賞賛してきた。しかし私は、そうした弁論を真似しようと望んでも真似することができないだろうし、またおそらく、真似することができたとしても真似しようとは望まないだろう。例えばもし、ファレルヌス地方のワインが好きな人がいても、前の執政官と同じくらい新しいものを飲みたいとは思わないだろうし、また反対に、オピーミウス〔前121年執政官〕とアニキウス〔前160年執政官〕が執政官の時のヴィンテージを求めてまで古いものを飲みたいとも思わないだろう。「それでもこの地のワインは最高だ。」私もそう思う。しかし古すぎると、私たちが求めている芳醇さがないし、実際のところ、飲むに耐えられないのだ(‘Thucydidem, ’ inquit, ‘imitamur.’ Optime, si historiam scribere, non si causas dicere cogitatis. Thucydides enim rerum gestarum pronuntiator sincerus et grandis etiam fuit; hoc forense concertatorium iudicale non tractavit genus. Orationes autem quas interposuit—

multae enim sunt—eas ego laudare soleo; imitari neque possim si velim, nec velim fortasse si possim. Ut si quis Falerno vino delectetur, sed eo nec ita novo ut proximis consulibus natum velit, nec rursus ita vetere ut Opimium aut Anicium consulem quaerat. 'Atqui hae notae sunt optimae.' Credo; sed nimia vetustas nec habet eam quam quaerimus suavitatem nec est iam sane tolerabilis.)」。『ブルートゥス』29 節「彼〔クレオーン〕と同時代の人はアルキビアデース、クリティアース、テーラーメネースである。この時代に、どのような弁論の種類が花開いていたかは、トゥーキューディデースの著作から最もよく推測されることができる。すなわち、言葉の重厚さ、思想の濃密さ、物事を圧縮することによる簡潔さであり、そしてまさにそれゆえに時々生じる曖昧さである(Huic aetati suppares Alcibiades Critias Theramenes; quibus temporibus quod dicendi genus viguerit ex Thucydidi scriptis, qui ipse tum fuit, intellegi maxime potest. Grandes erant verbis, crebi sententiis, compressione rerum breves et ob eam ipsam causam interdum subobscuri.)」。『弁論家について』第 2 巻 56 節「さて彼〔ヘロドトス〕の後、私が思うに、トゥーキューディデースは言論の技巧においてすべての人々を簡単に凌駕した。彼は、主題の頻度の点では、言葉の数が思想内容の数にほとんど匹敵するほど話題に富む。さらに、言葉の遣い方の点では、主題が言論によって輝きを与えられているのか、それとも言葉が思想内容によって輝きを与えられているのかが分からないほど的確で緻密である。しかし、彼は国事に携わっていたけれども、法廷弁論をする人たちの一人として彼を受け入れることはない。彼の諸著作そのものも、国事から離れて、誰であれアテーナイ人たちの指導者にはしばしばあったことなのだが、国外追放の身にあったときに書かれたと言われている。(et post illum Thucydides omnis dicendi artificio mea sententia facile vicit; qui ita creber est rerum frequentia, ut verborum prope numerum sententiarum numero consequatur, ita porro verbis est aptus et pressus, ut nescias, utrum res oratione an verba sententiis inlustrentur: atqui ne hunc quidem, quamquam est in re publica versatus, ex numero accepimus eorum, qui causas dictitarunt; et hos ipsos libros tum scripsisse dicitur, cum a re publica remotus atque, id quod optimo cuique Athenis accidere solitum est, in exsilium pulsus esset;)」、93 節「著作が最も古いと認められいるのはおそらく、ペリクレースとアルキビアデースであり、そして同時代人で、精緻にして鋭敏であり、簡潔にして、言葉よりもむしろ思想内容に満ち満ちているトゥーキューディデースがいる。(Antiquissimi fere sunt, quorum quidem scripta constent, Pericles atque Alcibiades et eadem aetate Thucydides, subtiles, acuti, breves, sententiisque magis quam verbis abundantes:)」。クインティリアーヌス『弁論家の教育』第 10 巻第 1 章 31 節以下も参照。

文献

『弁論家』のテキスト、翻訳、注釈

Bornecque, h., ed., *Ciceron: L'Orateur, Du Meilleur Genre d'Orateurs*, Paris (Les Belles Lettres), 1921.

Hubbell, H. M., ed. *Cicero V: Brutus, Orator*, Cambridge, Massachusetts (The Loeb Classical Library), 1962.

Kaster, R. A., tr., *Cicero : Brutus and Orator*, Oxford, 2020.

Sandys, J. E., ed. *M. Tulli Ciceronis ad M.Brutum Orator*, Cambridge, 1885.

Yon, A., ed., *M. Tullius Ciceron: L'Orateur A M. Brutus, Du Meilleur genre d'orateurs*, Paris (Les Belles Lettres), 1964.

Wilkins, A. S., *M. Tullii Ciceronis Rhetorica,* Tomus II, Oxford (Oxford Classical Texts), 1903.

『弁論家』以外のテキスト、翻訳、注釈

Calboli, G., *Cornifici seu incerti auctoris >Rhetorica ad C. Herennium<*, 3 Vols. Berlin, 2020.

Cope, E. M., *The Rhetoric of Aristotle*, 3 Vols. Cambridge, 1877.

May, J. M. and Wisse, J., *Cicero On the Ideal Orator*, Oxford, 2001.

Wilkins, A. S., *M. Tullii Ciceronis Rhetorica,* Tomus I, Oxford (Oxford Classical Texts), 1902.

Wilkins, A. S., *Cicero De oratore I-III*, Oxford (Oxford Classical Texts), 1892.

Moreschini, C., *M. Tullius Cicero gcripta quae manserunt omnia*, Fasc. 43 *De Finibut Bonorum et Malorum*, Leipziq, 2005.

Pohlenz, M., M. Tullius Cicero scripta quae manserunt omnia, Fasc. 44 Tusculanae Disputationes, Stuttgart, 1982.

Bayer, Karl. und Bayer, Gertrud *Marcus Tullius Cicero: TIMAEUS De Universitate*, Düsseldorf (Sammlung Tusculum), 2006.

『キケロー選集』（全 16 巻）岩波書店、1999 年～ 2002 年。

Winterbottom, M., *M. Fabi Qvintiliani Institvtionis Oratoriae Libri Dvodecim*, Tomus I, II, Oxford (Oxford Classical Texts), 1970.

Mynors, R.A.B., *P. Vergili Maronis Opera*, Oxford (Oxford Classical Texts), 1969.

研究書

May, J. M., ed., *Brill's Compannion to Cicero*, Leiden, 2002.

Merguet, H., *Handlexikon zu Cicero*, Leipzig, 1905–06.

訳者後記

キケロー『弁論家』（全 238 節）のうち 1 節から 32 節までの翻訳である。1 節から 32 節は『弁論家』全体の序文に相当する。今回の翻訳における各部分と見出しは以下の通りである。

1 節－ 32 節　序文
　1 節－ 2 節　ブルートゥスへ
　3 節－ 6 節　理想的な弁論家の追究
　7 節－ 10 節　理想的な弁論家とは
　11 節－ 19 節　理想的な弁論家と哲学
　20 節－ 23 節　弁論の三つの種類、いわゆるアッティカ主義
　24 節－ 32 節　本当のアッティカ主義

『弁論家』は、『弁論家について』、『ブルートゥス』の次に来る著作で、一連の弁論術著作の最後となる。これら三つの著作についてキケローは『占いについて』第 2 巻第 1 章（前 44 年 3 月）で、次のように言う。

> アリストテレースとテオプラストスは、緻密さにおいても豊かさにおいても抜きん出た人物であって、哲学と弁論の規則を結びつけたので、私の弁論術についての著作も同じ部類に登録するのが適切だと思う。すなわちその著作とは、三つが『弁論家について』であり、四番目が『ブルートゥス』で、五番目が『弁論家』である。
> Cumque Aristoteles itemque Theophrastus, exellentes viri cum subtilitate, tum copia, cum philosophia dicendi etiam praecepta conjunxerint, nostril quoque oratorii libri in eundem librorum numerum referendi videntur. Ita tres erunt de oratore, quartus Brutus, quintus Orator.

『弁論家について』は 3 巻からなり、次に『ブルートゥス』全 1 巻（前 46 年 3 月）、『弁論家』全 1 巻（前 46 年夏）が続く。これらがキケロー自身が認める弁論術書ということになる。これら以外にもキケローには、『発想論』（前 86 年）、『弁論術の分析』（前 54 年）、『最も優れた種類の弁論家について』（前 46 年夏）、『トピカ』（前 44 年 7 月）という弁論術に関係する著作がある。

『弁論家』の主題は、理想的な弁論家とはどういう人なのかである。理想的な弁論家は過去にいたのでもなく、未来にいるわけでもない。理念上の理想像としてある。この理想像を、キケローはプラトーンのイデアーにたとえる。個々一つ一つの美しさがあり、それらとは別

に美のイデアがあるように、個々一人一人の弁論家があり、彼らとは別に理想的な弁論家があるとする。こう考えてキケローは理想的な弁論家の特徴を論じ始める。

『弁論家』において、主に議論されていることは、弁論術の中でも措辞（修辞）に関わる部分である。弁論術は、発想、構成、措辞、記憶、口演の五つからなる。『弁論家』では、このうち措辞が取り上げられ、どういう語り方、どういう話し方が理想的なのかが論じられる。理想的な弁論家の議論において措辞が取り上げられるのは、当時のアッティカ風（ギリシア風）とアジア風の対立があった。アッティカ風とは、飾りたてることなく厳粛に語ることであり、アジア風とは豊かに装飾を施し煌びやかに語ることである。キケローは、どちらの立場にも与せず、むしろ両者を超えた理想の語り方を求めている。理想的な弁論家は独自の語り方を作り出すというわけである。

表向きは、キケローのこのような主張は客観的である。しかしアッティカ風とアジア風の区別は客観的なものではない。それは、アッティカ対アジアという対立であり、どちらが優れているか、どちらが劣っているかという論争であった。

『弁論家』を書いたもう一つの目的は、アジア風だと非難されたキケローが自分の弁論こそアッティカ風だと証明することにある。キケローは『ブルートゥス』においてアッティカ風を批判し、その後キケローは、逆にアッティカ主義者からアジア風だと非難された。アジア風という汚名を晴らすべく自分の弁論こそ本当のアッティカ風であり、自分を非難する人たちは真のアッティカ風を理解していないと説得するのがこの『弁論家』のもう一つの狙いである。

『弁論家』はあまり研究されてこなかったが、後世への影響は意外に大きい。この著作を、16 世紀にラムスは『ブルートゥスの質問』（1547 年）の中で徹底的に攻撃している。ラムスは、弁論術とは措辞と口演であり、発想と配置と記憶は対話術に属すると考えた。したがってラムスの考えは、キケローやクインティリアーヌスの考えとは全く相入れないのだが、ラムスが選んだ攻撃対象は『弁論家』であった。また序文では完全な弁論家像がプラトーンのイデア論と関連づけられ、完全な弁論家の姿は、目には見えないが、精神によって把握されると主張されている。精神によってのみ把握される理想像というこの考えは、パノフスキーの『イデア』冒頭で、芸術家が精神によって芸術的理念を把握しそれを基に作品を作るという近代の芸術理論の萌芽として紹介されている。

Summary

Orator Ciceronis 1–32

tr. Koji WATANABE

This is my translation of Cicero's *Orator* 1–32.

In 46 B. C. before his assasination, in responce to Brutus, Cicero wrote *Orator*, which was his last work on rhetoric. In *Orator* Cicero aimed to describe the ideal or perfect orator. Cicero insisted that the ideal or perfect orator might creat his own style of oration, that is to say, eloquence, beyond the controvacy Atticist vs Asiasist.

Orator 1–32 is the preface to the book. In this preface, Cicero told thanks to Brutus, dedicated this book to him, and complained that his contemporary orators did not understand the true style of oration because of their involving in the controversy Atticism vs Asiasism.